

私立短期大学図書館協議会

会報

Bulletin of Junior College Library Association

ISSN 0389-4452

編集者：菅原春雄

発行者：有岡章

発行所：私立短期大学図書館協議会

〒181 東京都三鷹市牟礼4-3-1

東京女子大学短期大学図書館内

電話(0422-45-4145 内234)

1985. 1. No. 16



短期大学図書館の現状と問題点

昭和59年度の学校基本調査によると、短期大学は学校数・在学生数とも殆ど横ばいであり、入学者数はむしろ減少している。一方18才人口は、昭和67年度までは増加するものの、その後は漸減し、昭和75年度にはピーク時に比べ50万人減の150万人台に落ち込むものと見られている。このような状況に対し、文部省は今後大学等の新設、学部・学科の増設は極力抑制し一定期間に限っての定員増によって対処する方針という。従って、ここ7、8年間は短大においてもかなりの学生増が期待できようが、昭和70年代には18才人口の絶対数の減少に伴い、私立大学の経営は厳しさを増すことは避けられないと思われる。

一方臨調は、各種補助金の見直しを政府に迫っており、私学への補助金も削減されるか、よくても横ばいに止まるものと思われる。財政面での厳しさは私学に止まらず国公立においても同様と思われる。

このような状況のなかで、私学の経営者としては経費削減の方針を打ち出すことは当然予測されることで、そのしわよせが図書館費、特に資料費の抑制となって表れる恐れがある。日本図書館協会(JLA)の調査(『図書館年鑑』'84、以下同じ)によると、短大図書館における資料費の昭和57年度における対前年度比の伸びは3.2%に止まり、それまで毎年10%を超えた伸び率は急速に低下している。

近年、短大においても巨費を投じて新館を建設する例がふえ、中にはコンピューターを導入する例も見受けられる。短大の図書館も徐々にレベルが高まりつつあるということであろう。しかし全体としては果たしてどうであろうか。その平均的なプロフィールをJLAの調査結果によって描いてみると次のようになる。

蔵書冊数の平均は約3,300冊で、1校当りの年間図書

千葉経済短期大学図書館長 鈴木英二 費は594万円(学生1人当り4,600円)。年間購入冊数は約1,800冊であるから、1冊平均の単価は3,300円となる。これは公共図書の約2倍近く、相当程度の高い学術書中心の収書となっている様子が伺われる。視聴覚教育の施設は殆どの短大が持たず、多様化するメディア時代に、旧態依然として図書中心の図書館に止まっているといえそうである。職員数は1館平均2.5人で、3人までの短大が全体の78%を占めている。

つまり短大の図書館は、3人程度の職員が3万冊強の蔵書を抱え、600万円ほどの図書費で1日平均6冊、年間1,800冊の図書を購入手、その整理、貸出、参考の各業務を行っている、ということになるうか。

貸出冊数は1館平均年間4,900冊、学生1人当り約3.5冊である。この数字は、4年制私立大学のそれと殆ど変わらないが、国立大学の9冊、公立大学の7冊、高専の8.4冊に比べると甚だ見劣りのするものである。

職員の司書資格の有無、資質について統計の数字は何も語ってはいないが、どんなに優秀な職員でも、総勢3名ではレファレンス部門を独立させることができないのは当然で、殆ど100%の短大が、よくいえば全員が総がかりで、実質的には十分な専門的訓練も受けない職員がカウンター業務の傍ら参考業務に当たっていることになる。

短大図書館の抱える問題はさまざまであるが、緊急に解決を迫られている課題は、学生の利用度の低さであり、その利用をどのように伸ばすかということであろう。

年間の貸出冊数が、学生1人当り4冊足らずと低い根本的な理由は、学習に当って図書館の蔵書を利用しなくても何ら支障を来さないという、現在の短大における教授=学習のあり方そのものにあると思われる。また、たとえ必要を感じたとしても、文献の探索やその利用法が

分らないということもあろう。そして、やっと見つけ取り出した図書の多くは学生の理解力を超えており、学習を離れた一般教養書や読みものの類は殆ど備えられていない、というのでは、学生にとって図書館はますます魅力のない存在とならざるを得ない。このような状況では、学生が図書を利用しないのも当然ということになるのではなからうか。

大学の図書館が教員や学生の研究・学習のためのものであることはいうまでもない。しかし、ヤング・アダルトである彼らの読書への幅広い要求に目をつむり、現代作家などの小説、よみもの等は一切公共図書館まかせということで、果して学生は図書館に魅力を持つであろうか。一定のレベル以上のものは、直接学習＝カリキュラムに関係のない分野の図書でも積極的に収集する必要があるのではなからうか。

梅棹忠夫氏の「学校は知識を教えはするが、その獲得の方法は教えない。(『知的生産の技術』岩波新書)」という指摘のとおり、わが国の学校教育では「学び方の指導」には極めて冷淡である。高等学校までの教育の中で、図書や図書館の利用についての指導が十分に行われていれば、大学での状況も変わるであろうが、それが殆ど期待できない現状では、一からの徹底した利用教育が必要である。図書館の利用教育は従来も入学時のオリエンテーションの一環として行われてきたが、それはせいぜい図書館案内の域を出るものではなく、より組織的な利用教育が行われねばならないであろう。

大阪女学院短大の丸本郁子教授は「利用教育とは、単に図書館の用い方のテクニックのいくつかを教えるということではない。短大の教育システムの中に組み込まれ、一定のプログラムのもとに、図書館側と教員とが協力して行うものだ」(『短期大学図書館研究』第1号)と述べているが、まことに至言である。

図書館の職員が利用指導を行うにあたっての最大の障害は、教員側の理解と協力が得にくいことであろう。この点、教員である図書館長の果さねばならない責任は大きい。後でも述べるように、教授法そのもののあり方とかかわることで、早急な解決は困難であろう。

図書館員としては、文献や参考図書などに道暁することはもちろん、さらに利用指導の方法についての研究を深め、期待される司書とならなければならない。JLA短大大会では、昨年と今年丸本教授の指導のもと、利用教育のワーク・ショップを開き、その成果が立派な報告書にまとめられている。このような研修が更に広まり、その成果が短大の教育現場に定着することが望まれる。

収書方針を再検討し蔵書構成に魅力を持たせ、利用教

育を徹底させ得たとしても、それだけで図書館の利用が促進されるというものではないであろう。「馬を水辺に連れていくことはできても、水を飲ませることはできない」の諺のとおり、学生自身に資料や文献へのニーズが生まれない限り、彼らは足を図書館に向けないと思われるからである。つまり利用促進の根本的な解決策は教授法の改善に尽きるということになるのであろう。ここでも図書館長の教員への働きかけが期待されるが、ことは個々の教員の教授法や大学教育そのもの、更には我が国の教育風土そのものにかかわることであり、一朝一夕には解決するものではないであろう。

最後に、図書館間の相互協力など残された若干の問題について触れておきたい。

近年、公共図書館においては地域内の図書館サービス網が整備され、更に県立図書館を頂点とする県内の相互協力の体制も整いつつある。しかし短大図書館においては、異種館間はもちろんのこと、短大図書館間における協力体制もまだまだ整備されていない。ちなみにJLAの調査によると他館への貸出冊数は544冊なのに対して借り受け冊数は1,815冊、文献複写においても受付件数1,977件に対して他館への依頼は、8,691件と、いずれも輸入超過となっている。相互協力は有無相通ずるための方策の一つであり、基本的にはgive and takeでなければなりたないものである。短大図書館は規模も小さく、力も弱いが、館種を超えた図書館のネットワークを構築する際の拠点として、頼られる存在となるためには、まずそれぞれの館が自力をつけることが必要であろう。また、私学においては、相互協力や地域社会への開放のためには、理事者や教授会の理解が必要であり、そのための啓蒙もまた重要なポイントである。

図書館の機械化、コンピュータの導入は、短大図書館では326館中4.3%の14館に過ぎ、まだまだ緒についたばかりである。私立短期大学図書館協議会では、いままです3回マイクロコンピュータを使用しての研修会を開催し、短大図書館のみならず関係各方面の関心と注目を浴びた。これはマイクロ・コンピュータによる文献管理のソフト・ウェアを開発した国学院大学栃木短大片山喜八郎氏の全面的な協力によるものであった。この方式によると大型コンピュータを必要とせず、経費も少なく済むので、短大図書館においても今後徐々に機械化が進むものと期待される。機械化にあたっては、その目的を明確にすることはもちろん、事前の研究と、運営全般にわたる見直しと整備が必要と思われる。

(これは昭和59年10月大阪での全国図書館大会短大大会での基調報告を基にまとめられたものである。)

〔案 内〕

マイコンによる図書館システムと

機械化研究委員会

事務局理事 渡 辺 敏 一

今日、図書館の機械化は、近代的な図書館運営にとって不可欠のものとなっております。ところで、図書館界をながめやると、高価な汎用コンピュータを駆使したシステムの実施例や報告の類は、国内外を問わず多くの例に接することができます。しかし日本の図書館界の現状では、このような高価な機械の導入を前提とする機械化は、大多数の図書館にとって所詮画餅に過ぎません。ここに、機械化の必要性が認識されながら、その実現が遅々として進展しない大きな理由を認めることができます。しかし、機械化の必要性は、人手不足や予算不足に苦しみ、他図書館との協力なしには十分なサービスを提供できにくい大多数の図書館にとってこそ、より切実なものといえます。

そこで私ども協議会は、マイコンによる図書館業務処理について、わが国最高水準の実践を進めている片山喜八郎先生および国学院栃木学園図書館の全面的援助のもとに、予算規模の小さな図書館でも導入可能な廉価なマイコンで、しかも全くの初心者でも使いこなせるシステムの開発と紹介を、この数年間にわたり一貫して続けてきました。これは予算や人的資源に恵まれない図書館に、機械化について自信と展望をもっていただき、更には機械化をベースとした高次元の図書館間協力の実現による相互の図書館の発展を念願してきたためです。かかる私ども協議会の実績を紹介する場としては、昭和57年に東京と札幌でNEC-PC 8000延50台と参加者170名により、また昭和58年には東京と大阪でNEC-PC 9800延110台と参加者260名により、この種の研修会としては図書館界最大規模のものを開催してまいりました。

以上のようなこれまでの研修会は図書館界で高い評価を受けてまいりました。しかし主催者としてこれまでの研修会を総括するとき、各々の時点では最先端のシステムを紹介してはまいりましたが、マイコンのハードおよびソフトの開発・進歩状況の限界により、図書館業務処理システムとしてはいま一つ完全を期することがないませんでした。しかし、昨年の研修会以降、ハードについては飛躍的な進歩がみられたため、片山先生を中心にプログラム開発メーカーを指導し、「図書館業務処理トータルシステム」(LIBROS)として完全なシステムを

完成することができました。このシステムの全貌は、この8月に開催した本協議会主催・日本図書館協会共催の研修会で紹介し、従来迄なら高価なオフコンや汎用コンピュータでのみ可能であった業務処理を楽々と処理し、参加者の賛辞をいただきました。この内容の詳細については、この8月に刊行された「マイコンによる文献管理：個人の書齋から図書館蔵書まで」(私立短期大学図書館協議会編、日本図書館協会発行、1,500円)をご覧くださいと存じます。同書は、上記の「LIBLOS」のみならず、他のシステムも含めた図書館の全業務にわたるマイコン処理について、初心者にも理解出来る内容にまとめたもので、この分野における他に例のない最高水準の実践として館界の高い評価をうけ、日本図書館協会からの要望もあって刊行したものです。

なお、上記の「図書館業務処理トータルシステム」(LIBLOS)は今年7月の市販と同時に、国学院大学栃木短大図書館、東京女子大学短大部図書館のほか、フェリス女学院短大図書館等の短期大学、和光大学等の大学図書館、山口県立等の公共図書館、一関工業高等専門学校等の高専、TDK株式会社開発研究所等の専門図書館など、はやくも約20の図書館で採用され、今後益々その採用館は増えつつあります。同時に、多数の図書館から、このシステム導入についての申し込みや相談が寄せられています。

ところで、各図書館が独自にコンピュータ化をはかると、経費や時間等の多大な物理的負担とともに、大きな精神的負担も要求されがちです。私ども協議会では、このような各図書館の負担を軽減し、さらにはマイコンによる新次元での相互協力実現のために、本協議会が共同開発したマイコン・システム(LIBLOS)を採用ないしは採用を検討中の図書館にたいしては、本協議会内に設置した「機械化研究委員会」によって、精神的援助を提供するとともに、採用館同士で共同研究を進めていくことにしました。何故ならば冒頭に申し上げた通り、機械化の必要性は、予算や人的資源に恵まれない中小規模の図書館にとってこそより切実であり、更には機械化をベースとした高次元の図書館間協力の実現なしにはこれらの図書館の発展はない、と考えるためです。もし貴

館で機械化を検討なさる場合は、以上のような私どもの実践とその趣旨をご理解の上、ご相談いただければと存じます。なお、この機械化研究委員会の詳細については、本会報の次号で紹介する予定です。

最後に、このような私ども協議会の一貫したマイコンとの取組は、マイコン関連会社の賛同をも得ることとなり、下記のようにマイコン・システムの導入に際して本

協議会の仲介を経るとき（本協議会の仲介を経ないときは割高な通常価格となります）、下記のような特別価格を設定していただくことができました。これも、予算規模の小さな図書館が機械化を実現しやすいようにと考慮したためです。通常価格よりも安く購入されたい場合には、本協議会事務局あてにお申し込み下さい。

付記) ソフトウェアの特別価格

1) 図書館業務処理トータル・システム（リードレックス、定価 150,000 円）

*特別価格 130,000 円（20,000 円割引）

2) 貸出管理システム（伊藤伊、定価 80,000 円）

*特別価格 70,000 円（10,000 円割引）

3) PC-PAL 日本語（大塚商会、定価 128,000 円）

*特別価格 108,000 円（20,000 円割引）

注：上記のシステムの内容の詳細は、前掲の「マイコンによる文献管理」に詳しい。

* お申込・問合せ先

〒181 東京都三鷹市牟礼4-3-1 東京女子大学短期大学部図書館内

私立短期大学図書館協議会機械化研究委員会

(TEL 0422-45-4145 内234)

— [地区活動報告] —

<北海道地区>

この1年半、加盟16館の総力をあげてとりくんできた「遂次刊行物総合目録'84」が完成し、6月に刊行した収録誌総数3,713誌、211ページの本「目録」は、質・量ともに当初の予想をこえる充実したものとなった。そしてこれが早速各短大内においても、また短大相互間においても活用され、資料の利用が活発化してきている。

（ご希望のむきは、北海道武蔵女子短期大学内坂本龍三宛にお申出ください。送料共3千円でお頒けいたします。）

当地区今年度の研修会は、9月20・21の両日にわたって開かれた。20日（木）は札幌市内真駒内青少年会館において、滋賀県立図書館長の前川恒雄氏の講演「図書館発展の基礎」があり、これには道内館種からも聴講者があり、熱心に聴きいていた。

翌21日（金）は、武蔵女子短大において研修会が行われ、ここでは、最近各館において問題となっている学生

の利用をいかに伸ばすかについて、各館の実情の報告をもとに、熱心な話し合いと意見が述べられた。（S記）

<東北地区>

A. 研修会の件

当地区では57年度以来、毎年一つの研修テーマを掲げて計画的な研修行事を行って来ている。57年度は「私短図協」本部より渡辺敏一事務局長、地元の山形電子計算センターより屋島正機部長を講師にむかえて「短大図書館におけるコンピュータ導入の実際とその活用ならびに派生する諸問題」に取り組んだが、58年度は「短大図書館の資料整理部門における諸問題」をテーマとし、会長もり・きよし先生を講師にお招きして、もり先生より整理部門の蘊奥ともいふべき諸事項を御指導いただいたのは大きな収穫であった。

59年度の研修会は加盟館からの要望に従い、「図書館

員に必要なレファレンス・ワーク』をテーマとして研修することに決った。なお、この研修テーマ設定の根底には、ここ数年間に統計上にはっきりと出ている全国的な「短大図書館」の利用率の伸びの低さがあげられる。国公立・私立の四年制大学図書館は利用率が順調に伸びているが、短大系の図書館の利用率の伸びは不安定で心もとない伸び方である。利用率の伸びの著しいのは、最近国公立系大学を凌いで活気の溢れている私立四年制大学の図書館である。52年度を100とすると、私立四年制大学図書館の利用率は58年度現在で129%を示している。これに対して同じく短大系図書館の利用率は110%にとどまっている。勿論、カリキュラム、その他多くの事情はあるが、図書館員の教職員・学生の利用者に対するレファレンスのあり方に何か、短大の場合、欠けているものがあるのではなかろうか。レファレンスをきめ細かにすることによって短大図書館にも活気の芽が出てくるのではないか。あと纏説は避けるが、この問題に一つの掘り下げをやってみたいという地区の一つの試みである。

講師は公立図書館におけるレファレンスに新風を開拓され、なお、現在、宮城教育大その他の大学でレファレンス問題を掲げて教鞭を執られている黒田一之先生である。

B. 「昭和60年度全国図書館大会（於仙台市）」の件

「情報新時代の図書館づくり」をテーマに掲げた大阪大会が、去る十月遺憾なく関西図書館界の「地力」を示して終了した。批判はどうあろうとも「情報新時代」という時代設定と把握に、地元大阪人の未来に賭ける壮大な夢と意欲が澎湃と満ち溢れているのをまざまざと感得させられた。〈60年度〉大会は場面は一転して「東北みちのく」に移る。図書館も少ない、学校も少ない、図書館人も少ない。しかも、宮城県仙台市での開催は〈60年度〉が第一回である。

地元宮城県では、しかしながら、去る5月の第一回の準備委員会以来真剣に準備が進められている。前回の「地力」の大阪大会に対して、前歴もなく、実績もない、みちのく宮城県はまさに「無」から「有」を生み出すべく、フロンティア・スピリットの果敢な努力が続けられている。

大会テーマは「生涯学習の時代に応える図書館づくりを進めよう」に決った。現時点の懸案の問題にスポットをあてた大会テーマである。大学図書館も、短大図書館も「生涯学習」とは無縁ではない。宮城県大会は第10分科会まで設けられているが、それぞれの分科会は「大会テーマ」を踏まえ、あるいはこれに独自性を加えて設定されることになる。

「第4分科会短大・高専図書館」のテーマ設定は来春3月～4月中旬に開催の第1回実行委員会に発表を目的

としているので、3月中には決定の予定で目下、鋭意検討中である。全国大会の分科会テーマは勿論、全国レベルのスケールと内容をもたねばならない、というのが地元の意見であるが、幸いにして各方面から貴重など指導、ご助言を頂いていることは地元への大きな激励となっている。

「私短図協」の名誉会長もり・きよし先生からは書信で細かな御配慮・御助言をいただいた。渡辺敏一事務局長さんからは中央での集会、役員会などの際の参考となるさまざまな意見を御教示いただき、しかも、平素の繁務の中を具体的な御助言をいただいたこと五・六回にとどまらない、日本図書館協会短期大学図書館部会の椎葉伸子幹事先生からは本年5月の部会総会以来、機会ある毎に、貴重な御示唆をいただいできてきているが、去る10月の大阪大会では「公立短大図協」の全国会長の由比凌先生、それに地元の府立高専津田先生（大阪大会の実行委員、短大分科会の運営担当者）との話し合いの場をご斡旋いただき、両先生と忌憚なく意見の交換が行われた上、適切な御助言をいただくことが出来たことは、ほんとうに感謝に堪えないことであった。

地元の宮城県では第1回準備委員会より委員として活躍された仙台白百合短大の宮城先生が7月に発病、入院されたため、その後は同じく仙台の聖和学園短大の図書館主任高城弘子先生が多忙な館務の中を委員会に出席され、常に建設的な意見を発表されており、地元公立短大の代表である宮城農業短大の橋本館長先生と共に大変なご努力をなさっておられる。今後とも、本部の図書館界の一層の発展のためにも、みちのく仙台大会に御後援をよろしく願いいたします。（中村）

〈関東・甲信越地区〉

私立短期大学図書館 関東甲信越地区協議会総会・講演会・見学会

1. 日時 昭和59年11月28日 午前9:30～
1. 場所 日本私学振興財団 上智大学図書館
1. 出席者 40校 50名（委任状提出 25校）
1. 日程及び内容
 - a 講演会 9:30～11:00
「文献情報と図書館」
講師 東大文献センター 井上 如先生
講演要旨 別紙
 - b 昭和59年度総会 11:00～12:00
 - (1) 昭和59年度事業報告（経過報告）
 - (2) 昭和59年度会計報告（経過報告）

- (3) 昭和60年度理事及び役員選出
→ 次回総会で選出することに決定

- (4) アンケート結果について

c 見学会 13:30~15:00

上智大学図書館

演 題

「文献情報と図書館」

1. 文献情報の世界

文献情報を送り手と受け手という観点からとらえ直し、それが図書館の機能とどうかかわっているかについて説明があった。

文献情報には、特定の受け手を持つ「日記」や「文書(モンジョ)」以外に、不特定多数の受け手を想定した「編著」がある。今日の図書館資料の大半を占めるこの編著は、送り手側のペースで、図書館の対応を待つこともなく、「物」として伝来し続けている。

しかし資料が集積されればされるほど、その群に分け入る道標がなければ、情報として存在しえない。図書館が文献情報伝達の中継機関としての役割を果たすには、二次資料の整備を含めた受け手側の研究を今後進めてゆく必要がある。

2. 図書館の世界

オンデマンド出版やデータベース化といった資料の質的变化を背景に、図書館以外の機関がそうした文献情報を提供し始めたことで、図書館が従来より行ってきた機能が外側から切り崩されてきている。

一方、図書館内部でも電算化によって人的業務がしだいに機械に置き換えられつつある。その極みともいえる「無人図書館論」に反論できるだけの「図書館員の専門性」のありかたが再検討されるべき時期にきている。

<東海・北陸地区>

<会報12号 36ページ 150部 59. 7. 1 発行>

内容

1. 昭和59年度 第1回幹事会記事
2. 研修委員会(第1回)記事
3. 北陸部会研修会報告
4. [見学記] 名古屋市鶴舞中央図書館見学記
5. 図書館実務講座(東海地区)第1期第1回記事
6. 図書館実務講座(東海地区)第1期第2回記事
7. 私立短期大学東海・北陸地区図書館協議会内規
8. 名簿(会員名簿、役員名簿〔図書館職員名簿〕)

<総大会 昭和59年度>

日 時: 昭和59年 9月21日(金)

午前11時30分~午後4時

場 所: 一宮女子短期大学

出席者: 19校 29名

I. 総会 午前11時30分~午後12時10分

1. 開会 司会 一宮女子短期大学 田中 直利
2. 挨拶 会長 愛知淑徳短期大学附属図書館長
千葉 善根
会場校 一宮女子短期大学学長
吉田 武郎

3. 議長 名古屋短期大学 森野 貞次郎

4. 協議

(1) 会勢報告

年度当初29校。高田短期大学、名古屋自由学院短期大学が加盟し、9月1日現在31校。

(2) 昭和58年度事業報告及び決算

(3) 東海・北陸地区協議会内規一部改正

(4) 昭和59・60年度役員改選

(5) 昭和59年度事業計画及び予算

(6) 昭和59年度事業中間報告

(7) 北陸部会報告

ア. 図書館実務講座第1期第1回開催

日 時: 昭和59年 8月30日

午前11時~午後4時

場 所: 北陸学院短期大学

出席者: 6校 17名

※第2・3回開催日時は未定であるが年度内に実施予定。

イ. 定例会 10月開催予定

(8) 昭和60年度総大会会場校について

会場校 東海学園女子短期大学

開催時期 未定

(9) 図書館実務講座第2期開講について

第1期同様に本部主催とし、研修委員会で具体的に計画する。

以上の議事(2)~(6)については会報12号に掲載については、可決、承認された。

5. 図書館実務講座(第1期)修了証書授与

3回出席者17名、2回出席者12名、合計29名を代表して、中日本自動車短期大学、藪下 学氏へ、本部理事 渡辺 敏一氏より修了証書が授与された。

II. 講演会 午後1時30分~午後4時

演題: コンピュータ導入のメリット・デメリット

について

講師：東京女子大学短期大学部附属図書館課長補佐 私立短期大学図書館協議会事務局担当理事 渡辺 敏一氏

閉会 午後4時

<図書館実務講座（東海地区）第1期第3回>

日時：昭和59年8月21日（火）
午前10時30分～午後4時

場所：愛知淑徳大学附属図書館

講座内容：図書製の

講師：愛知淑徳短期大学附属図書館事務長 林 勇一氏

<図書館実務講座（北陸地区）第1期第1回>

日時：昭和59年8月30日（木）
午前11時～午後4時

場所：北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館

北陸3県の短期大学図書館6館から17名が集まり、三つのテーマについて実務講座が開かれた。

内容

1. 会計処理について 金沢女子短期大学 長田 貞子氏
2. 非資産図書の受入 金城短期大学 北野 良子氏
3. 蔵書点検について 富山女子短期大学 井黒 陽子氏

<研修・編集委員会報告>

日時：昭和59年10月16日（火）午後2時～3時

場所：愛知淑徳短期大学

I. 研修委員会

出席：4校（愛知淑徳、暁学園、大垣女子、東海学園女子）

議事：第2期実務講座のプログラム・運営及び今後の研究課題について

1. アンケートを参考にして、講座内容・日時・会場を次のように決めた。

(1) 第1回

内容：「図書の整理・分類・目録について」

講師：林 勇一氏

日時：昭和59年11月30日（金）

午前10時30分～午後4時

場所：暁学園短期大学

(2) 第2回

内容：「参考業務の運用について」

講師：醍醐 光子氏（内定）

日時：昭和60年3月下旬（予定）

場所：東邦学園短期大学（内定）

(3) 第3回

内容：「図書館における文書事務について」

講師：夏目 あさゑ氏（内定）

場所：日時・未定

2. フリーターキングの要望に答えるため、60年度の総大会のあとに、その場を設定する。
3. 今後の課題として次の2点があげられた。
 - (1) 参考業務に関するアンケートをとること。
 - (2) 「相互利用ハンドブック」の再編成。

II. 編集委員会

出席：4校（愛知淑徳、一宮女子、東邦学園、名古屋）

議事：会報13号の編集経過報告及び14号の記事内容の検討

1. 会報13号（59年12月発行予定）の編集経過が次のように報告された。
内容は従来のもを踏襲する。各地区1点をめどに原稿を依頼した。
2. 会報14号（60年7月発行予定）の記事内容を検討し、次のような方針をたてた。
 - (1) 14号より統一テーマを設ける。テーマは「誰でも、気楽に」書ける「身近な」という観点から14号「文庫について」とする。
 - (2) 「巻頭言」をやめる。

<図書館実務講座（北陸地区）第1期第2回>

日時：昭和59年11月16日（金）

午前10時30分～午後4時

場所：北陸学院短期大学ヘッセル記念図書館

出席者：13名（6校）

内容

1. 視聴覚資料とその整理について
北陸学院短期大学 安部 玲子氏
2. 簡易図書修理
仁愛女子短期大学 加藤 人己氏

<図書館実務講座 第2期第1回>

日時：昭和59年11月30日（金）

午前10時30分～午後4時

場所：暁学園短期大学

出席者：28名（18校）

講座内容：図書の目録と分類

講師：愛知淑徳短期大学附属図書館事務長 林 勇一氏

新図書館完成——FACOM9450 IIを導入して——

兵庫女子短期大学図書館 田井中 勇

本学新図書館は、短大開学三十周年を記念して建設された河野記念館の中に、約2,000㎡の広さを持つ図書館として、1984年6月10日にオープンしました。

○1階には、メインカウンター、閲覧席62席・キャレル11席の閲覧コーナーの他、新聞・雑誌、新刊展示、ロッカーの各コーナーがあり、1階開架図書は約13,000冊。
○2階には、レファレンスカウンター、閲覧席54席の閲覧コーナーの他、レコード・テープコーナー（レコードブース5席・テープブース5席）、児童書コーナーがあり、2階開架図書は約12,000冊、他に88,000冊収納可能な、電動移動書架を備えた書庫を設けています。
○3階には、14ブース（1ブース3席）のAVブースルーム（昭和60年6月頃オープン予定）の他、図書館ゼミルーム1室、図書館研究室4室があります。

新図書館建築には、基本設計から図書館長以下館員も携わり、「これからの図書館は、書籍収集の館（やかた）ではなく、広い分野にわたる書籍の収集と、その公開的貸出し運営を軸に、多角的な情報を学ぶ人たちに提供してゆく、「情報センター」として位置づけられる可能性を持った図書館にしていかななくてはいけない。」という館長以下図書館の願いが、かなりかなえられた形で新図書館が出来上がってきました。

そして「情報センター」として位置づけられる可能性を持った図書館にする為に欠かすことの出来なかったのが、コンピューターだったのです。

この図書館コンピューター導入については、かねてから大学当局に新図書館完成時にはオフコン導入を強く要望していました。しかし費用がかかりすぎるといってオフコン導入は暗礁にのり上げていたのです。しかし新図書館に是非コンピューター導入をとの願いが捨て切れず、59年1月にパソコンシステムを妥協案として再提出しました。結果妥協案が認められ、59年2月FACOM9450 IIパソコンシステムの導入が正式決定したのです。

妥協案がいざ決定されると、作業スケジュールは業者の方と話し合っていたのですが、何からいったい手をつけていったらいいのかというのがその時の実感でした。

オープン時にコンピューターにどうしてもやらせたかったが、貸出し、返却、検索（書名、著者、件名、分類）

業務。それもスピーディーな処理。

その為には、図書マスター作成と図書・利用者カードに、バーコードラベル貼付という作業が不可欠だったのです。本学蔵書約5万冊の図書マスターは、1冊508バイト内のデータにしてフロッピィに入力。そしてFACOM9450 IIシステムに増設した30MBのディスクにフロッピィをかけ、1冊240バイトにして入力、つまりこの増設したディスクのおかげで、この他検索に必要なデータも入力可能になったわけです。

図書館利用者カードは図書館でデザインし、全教職員、学生に配布。そして全ての図書と利用者カードにバーコードを貼付した事により、バーコードスキャナーでスキャンするだけで貸出し、返却処理が出来、スピーディーなカウンター業務が可能になったのです。

機器の搬入が6月4日

日本システム開発グループの駒田氏のビジネスの粋をはるかにこえた献身的な協力もあって、何とか目標だった業務が稼働出来る形で、「わあ！ホテルのロビーみたい」の学生の声とともに、6月10日のオープンを迎えることが出来ました。

開館して約半年、入館者は旧図書館の約3倍。旧図書館の時には想像も出来なかった学生の利用状況。そんなうれしい状況の中、新刊入力に追われながらも、60年度中には他の業務もコンピューターへの移行を実現させ、「情報センター」として位置づけられる図書館に、1歩でも近づかせようと微力ながらも奮闘している今日この頃です。

＜ 事 務 局 報 告 ＞

△ 会 勢 (84.12.20 現在)				
北 海 道	16	近 畿	54	
東 北	13	中 ・ 四 国	23	
関東・甲信越	79	九 州	28	
東海・北陸	30	合 計	243	

△ 新規加盟館紹介<会報15号以後追加>

- 東海・北陸地区
 - ・ 浜松短期大学図書館
- 近畿地区
 - ・ 大阪電気通信大学短期大学部図書館
 - ・ 四條畷学園女子短期大学図書館

△ 役員会

△ 本部役員会

- 昭和59年度第3回 [59.7.9 (月) 日本図書館協会] 報告事項

1. 事務局報告
2. IFLA報告
3. その他

協議事項

1. 昭和59年度短期大学図書館全国研修会の件
2. その他

- 昭和59年度第4回 [59.10.18 (木) 関東学院女子短大図書館]

報告事項

1. 事務局報告
2. 地区活動報告
3. 昭和59年度短期大学図書館全国研修会報告
4. その他

協議事項

1. 短期大学図書館研究6号の件
2. 機械化研究委員会設置の件
3. 加盟館名簿刊行の件
4. その他

- 昭和59年度第5回 [59.12.4 (火) 青少年研修会館]

報告事項

1. 事務局報告
2. 地区活動報告
3. その他

協議事項

1. 短期大学図書館研究6号の件 (継続)

2. 加盟館名簿刊行の件 (継続)
3. 機械化研究委員会の件 (継続)
4. 次期運営体制の件 (継続)
5. その他

○ 待望の加盟館名簿 年度内に出版

今年度事業の一つとして加盟館名簿発行の計画があり、役員会で種々内容項目の検討を行い、各地区へ名簿提出をお願いし、回収と同時に編集が進められており、年度内には加盟館に配布できる予定である。

○ 「短期大学図書館研究」第6号の投稿募集

◎ 締 切 日: '85年6月末日(当初の締切日を変更)

◎ 特集記事: "コンピュータによる業務処理"

今後、各号に特色を持たせるため、特集記事を組む予定です。第6号では、上記のとおり計画しています。その実施例・計画(案)・書誌作成などでの投稿を期待しています。

その他の、調査・研究報告、事例報告、書誌などでの原稿も従来どおり募集しています。

◎ 投稿先・指定原稿用紙申込先

1. 〒215 神奈川県川崎市麻生区東百合丘3-4-1
調布学園女子短期大学図書館・網本正己宛
TEL 044-966-9211 ~ 3
2. 本協議会事務局

原稿募集要項・執筆要項は、第5号巻末を参照してください

— 編集後記 —

会報第16号をお届けいたします。昭和59年度を振り返って見ると、5月に会長辞任のあと、有岡会長代行のもとに、8月には、第3回「マイコンによる図書館業務処理」をテーマとして短大図書館研修会が開かれ、多数の参加者を得た。こうした現象は今日機械化が必須化になってきたことと言えよう。また図書館サービスの多様化にともない、館員の資質の向上が問われ、さらに基本的短大設置基準の見直しも、今後検討していかなければならない課題ではないか、こうした話題を館内で、地区内で、論議されることを期待したい。 (すがわら)